

肉体改造エクスタシー 特別コース編 サンプル

入会案内／各種コースについて／

特別コース

専用のお部屋（風呂・トイレ・ベッド付）と専用のトレーニングルームを完備。

・ 一対一コース

専属トレーナーと二人きりでトレーニングいただけます。

・ 二対一コース

専属トレーナーによる指導の下、専属M性スタッフの体を使ってトレーニングいただけます。

Sコース

トレーニングルームにいるM性スタッフの体を使ってトレーニングいただけます。

Mコース

S性トレーナーによる指導の下、トレーニングいただけます。

その他のコースをご希望の方は、ご遠慮なくカウンターまでお申し付けください。

「おはようございます」

「シュリくん、おはようございます。もうすぐ嶋田さまがいらっしゃいますが、緊張していませんか」

「少しだけ……でも大丈夫です。支度してきます！」

支配人に頭を下げ、更衣室に急ぐ。

嶋田は特別コースの入会希望者で、このあとの面談でトレーナーが決まれば入会となる。第一希望として指名されたトレーナーから面談に入り、気に入られなければ第二希望の人……となっていくので、第一希望になっているとはいえ、自分を選んでもらえるか、どうしても緊張してしまう。

会員専属のトレーナーがつく特別コースは、さらに二つのコースに分かれる。

一つはトレーナーと会員が一对一のコース。もう一つは二対一で、嗜虐趣味である会員とトレーナーが被虐趣味の従業員の体を使ってトレーニングを行っていくコース。

幸い嶋田は一对一のトレーニングを望んでいるので、被虐趣味——いわゆるM性トレーナーのシュリもこうして面談の相手に選んでもらうことができた。

（かつこいいんだよね……）

もし嶋田の専属トレーナーがシュリに決まれば、これからずっと、嶋田からの「チェンジ」がない限りはシュリがつくことになる。個室で二人きりで、いやらしい部分を使いながらのトレーニング。気持ちよかったり苦しかったり……嶋田はいったいどんなプレイが好きなのだろう——するのは筋力トレーニングなのに、そうやってつい「プレイ」として考えてしまう。でもそう思ってもおかしくないくらい、ここでのトレーニングはいやらしくて——。

（急がなきゃ）

面談ではお互いの外見だけでなく、内面の見極めも重要になる。単純に信頼し合える相手かどうかというものもあるけれど、それよりさらに踏み込んで、SMプレイの好みや結合部のサイズ感、フェチと感部にいたるまで、いろんなことを確認されるのだ。

更衣室で専用のトレーニングウェアに着替え、荷物をすべてロッカーにしまう。仕事に着用が認められるのは衣類と時計だけ。ピアスやネックレス、指輪も禁止。

（あ……でも貞操帯はいんだっけ……）

しかしそれは、会員が望んだ場合だけだ。といってもトレーニングにはトレーナーのペニスを使ったものもあるので、望まれたからといってずっとつけっぱなしになるわけではないけれど。

嶋田はシュリに貞操を求めるだろうか。このおちんちは俺だけのものだよなんて言っ

（あー緊張するっ！）

鏡を見て髪の毛の乱れを直す。軽く両頬を叩いて更衣室を出ると、そこにはすでに支配人が立

っていた。頭を下げ、待たせたことを詫げる。

「すみません、お待たせしました」

「まだ時間に余裕がありますよ。用意はばっちりですか？」

「はい……大丈夫です！」

緊張するけれど、面談は支配人も必ず立ち会う。いくらお互い「この人がいい」と思っても、事故に繋がりがかねない重大な不一致があれば問題だからだ。

「では参りましょう」

「いよいよだ。」

緊張で、踏み出す足と手の動きが噛み合わずぎくしゃくする。それを見た支配人の「何かあったらフォローしますから」という言葉で、ようやくぎこちないながらも笑顔を作ることができた。

「こんにちは。はじめまして」

「は、はじめましてっ。トレーナーのシュリです。よろしくお願いいたしますっ！」

嶋田はすぐに面談室にやってきた。グレーのスーツがよく似合う大人の男性。顔つきも精悍で、まるでここで働いているS性トレーナーみたいでカッコいい。

「こちらこそよろしく。嶋田です」

「よろしくお願いします」

差し出された手は厚かった。きつと握力も相当あるだろうに、握り返す手は優しくて。

「どうぞお座りください」

支配人の言葉で、向かい合ってソファに腰を下ろした。支配人はシュリの左に座る。

「では面談を始めます。まずはシュリの紹介をいたします」

トレーナー候補の紹介から始まるのは、会員にトレーナーが好みかどうかを確認してもらうためだ。そもそも面談に至る前にそれなりに相手の印象などは知っているのだけれど、どうしても譲れないプレイがあたりすると、破綻してしまうから。

その場合は第二候補との面談に移るので、担当にならないトレーナーにむやみに会員の情報を与えてしまわないようにしているのだ。

「シュリは二十二歳で恋愛対象も性自認もどちらも男性です」

支配人の言葉に嶋田はしつかりとうなずいた。

「セックスの経験は前後ともありません」

前後、とはペニスとアナルだ。簡単に言ってしまうえば童貞で処女——恥ずかしい紹介。でも大切なこと。

「精通は済んでおります」

嶋田はまたしつかりとうなずいた。

それを確認し、支配人が続ける。

「では続いて——具体的な好みのプレイですが、まだそれらしい経験もないもので……申し訳ございません」

隣で支配人が頭を下げたことに気付き、慌ててシュリも頭を下げる。
「すみませんっ」

「いや、かまわないよ。未経験というのは聞いていたし、それが真っ白でかわいいと思ったから」

嶋田の言葉に、支配人は安心したようにほほ笑んだ。

「ありがとうございます。一応NGプレイは食糞のみですが、如何せん経験がないものですから」

こんなふうに関心することを解説されるというのはどうにも恥ずかしい。でも知ってもらい、それでいいと思ってもらわなければどうにもならない……そう自分に言い聞かせ、間違いがないことを伝えるために顎を引く。

でももし嶋田の希望が食糞だったら……。不安で俯いていると、「いや」と聞こえた。顔を上げて嶋田を見る。

「私も食糞には興味がないから大丈夫だよ」

不安な気持ちが出てしまっていたのだろうか。嶋田はシュリにほほ笑みかけながら言った。「だから大丈夫。他のプレイも一つ一つ確認しながらいきたい」

「ではここまで、お好みには合致しておりますか」

「はい」

端的な返事。そのとき嶋田はしっかりと支配人に視線をやったけれど、その直後、焦げ付きそうなほどに熱のある視線をシュリに向けた。

ぞくりとした。まるで今から食べられてしまうかのように——食べられたい。食べられてみたいと思った。

「それでは、続いて体をご確認ください」

いよいよだ、と心臓が早くなった。緊張で喉が渇く。

「うん、よろしく」

支配人がシュリを見た。うなずき、立ち上がる。

「失礼します」

トレーナー用のトレーニングウェアはSもMも関係がない。一般的なつくりのそれを一枚ずつ脱ぎ、下着まで脱いで裸になる。

(恥ずかしいっ……)

恥ずかしすぎて、目を開けてはいられなかった。それでも顔、胸、腹……と嶋田の視線が下りていくのを熱で感じる。

「ご覧のとおり、体質と若さもあって体は薄いですが、トレーナーとしての知識は持っておりますので」

「ああ、とてもきれいな体だね。それにしても白い」

「あまり焼けなくて」

「そう。とてもきれい……ペニスも白いんだね」

「っ……」

「使っていないことがよくわかるかわいいペニスだ」

「あ……」

嶋田が身を乗り出した。じっくり見ようとされているのがわかり、羞恥に顔が熱くなる。

「オナニーの頻度はそう多くないのかな」

「っ……いえ……」

普通がわからない。でも毎日してしまうのは「そう多くない」には当てはまらないだろう。

「じゃあ多いんだ？」

「……はい……」

この確認の時間において、体を隠すことは禁じられていた。じつとペニスを見つめられ、少しづつそこが形を変え始めてしまう。

「ああ、見られて感じるタイプなんだね」

「は、いつ……」

認める返事をしたことで、さらにペニスは角度を変えた。幸いなのは、手を使わないと皮がむけきらないことだろうか。一番恥ずかしくて大事なところは隠れたままだ。

「まだ使ったことがないから白いのか……それにしても色白だね」

「えっと、祖父が外国人だったと聞いてます……」

「ああ、隔世遺伝かな。髪も……目も少し茶色いね。とてもきれいだ」

祖父といっても会ったことはない。なぜかはわからないけれど、母は親戚関係について話さなかった。だから祖父が外国人というのも本当なのか——でもこのペニスの色は確かに外国の血が入っているとと言えるだろう。

「皮はむけるのかな。亀頭を見せてくれる？」

「はい……」

手を使い、完全に勃起してしまったペニスの皮をむく。そうすると現れるのは、驚くほど赤に近い濃いピンク色の亀頭。

「すごいな……竿が白いのに亀頭は真っ赤だ。とてもいやらしいね」

「恥ずかしいです……」

あまり見ないでほしい。

けれど、そういえばここに面接に来たときにも、ペニスを見た面接官に、モデル部門に入らないかと誘われた。下着や玩具の撮影に使いたいと。必ず売れるよと言われたくらいなので、それほどいやらしいということなのだろう。

（それはそれですごくえっちだったかも……）

正直に言うとしらぬ。ペニスを褒められながら至近距離から撮影され、それを販売に使われる。みんなに見てもらえると思うと——。

「ああ、恥ずかしいともっと勃起しちゃうね。でもこれ以上はもう大きくなるかな？ 次はカウパーを出す番かな」

「っあ……」

どうやら嶋田は言葉責めや羞恥責めを好むタイプらしい——今のところは相性抜群。でも

もうペニスが苦しくてつらい。

「計測オナニーでは平均一分で射精に至りました。そのためオナホールを使ったトレーニングには不向きかもしれません」

支配人の言葉に嶋田がニヤリと口角を上げた。

「へえ、そんなにすぐにイッチャうんだ。感じやすいんだね。かわいいな」

「っ……」

支配人の説明も嶋田の反応も恥ずかしい——恥ずかしくて、感じてしまう。

「それからアナルですが、こちらは今、四センチのデイルドを啜えられる状態です。シユリ、お尻を」

「は、はいっ」

くると背を向け、先ほどまで座っていたソファの座面に膝をつく。大きく膝を開き、背もたれに上体をのせてお尻を突き出すようにして陰部をさらす。

(ううう……見られてる……)

本来人に見せることのない恥ずかしいところをすべて見られてしまっている。アナルはもちろん、ふりつと張った陰囊まで。毛の一本もないそこは、会陰だって丸見えた。

「アナルは淡いピンク……とてもきれいだね」

「洗浄は済んでおりますので、内部の感触もご確認いただけます」

「指を入れても？」

「はい。ローションはこちらをお使いください」

「ありがとうございます」

ドキドキした。だって今まで、誰も入ったことがないのだ。経験があるのは自分の指とデイルドだけ。だから、これが本当に初めて。

「入れるよ。お尻に力を入れてごらん」

「はい……っ」

何かを入れるときは排便するときのようにいきむ——それは研修でも教わっていたけれど、こうしてアナルを見られながらいきむなんて。

「あっ」

嶋田の指がアナルのしわを撫でた。まるであやすようにくると円を描かれる。

「あ、あっ」

「感度も抜群だね」

「やあっ」

ローションをまとったぬるぬるの指が一本入ってきた。痛みはない。むしろ物足りないくらい。

「あっ、あっ」

指は器用に内部を検めた。どこに触られても気持ちいい。指がアナルを広げていると思うだけで感じてしまう。

「——うん、アナルの締まりも、中の状態もとても好みだ。シユリくんさえよければぜひ私

のトレーナーになってほしいな」

~~~~~

三日後、待ちに待ったトレーニングの日がやってきた。

アナルの準備は家でしてきた。だからここでの支度は着替えと飲み物の準備くらい。

カテーテルを使って膀胱を空にし、洗浄してからスポーツドリンクを膀胱に入れる。着替えは……本来なら支給されているトレーニングウェアを着るのだけれど、面談の帰り、嶋田は自分の使うトレーニングウェアを「シユリの体温で」温めておいてほしいと言って置いていった。それは抱いておいてほしいというのではなく、素肌の上に着て温めてほしいという意味で……しかも、「下着もなしで」と嶋田は言っていた。だから一度全裸になり、大きすぎるトレーニングウェアを身にまとう。

(恥ずかしいな……)

サイズが合っていないせいでスースーする。それにシャワーは浴びてきているものの、汚してしまわないかが気になった。

(初日なのに……)

その話のとき、嶋田は「濡らしてしまってもかまわないよ」と言っていた。そのときは意味がわからず、「着替えたあとは飲み物を飲まないようにするので大丈夫です」と答え、嶋田はそれに「そうか」と笑っていたけれど……着替えてみて、そこでようやく嶋田が言いたかったことを理解した。

嶋田のトレーニングウェアに包まれたことで、これからの行為が頭に浮かんでしまったのだ。嶋田にいやらしいことをされる——そう思っただけでペニスは勝手に立ち上がり、ウェアのズボンを持ち上げた。

しかも着替えが終われば一人でベッドに入り、嶋田の場所を温めておかなくてはならないのだ。そうして嶋田が到着したらトレーニングウェアを脱いで渡して着替えてもらい、シユリは全裸のまま嶋田とベッドに入ってお互いを高め合う。

それからようやくトレーニングが始まるのだ。

(ううう……どうしよう……)

ペニスの疼きが止まらない。だってお腹の中には今、嶋田に飲んでもらうためのスポーツドリンクが入っている。嶋田はこれを、いったいどうやって飲むのだろう。啜ってしまうのか、それともコップをペニスの前に差し出し、出すところをまじまじと見てから口に含むのか——。

(すごいえっち……)

まだ誰とも体を繋いだことがないというのに、それより先にこんなにいやらしいことをしようとしている。そう思うだけでさらに興奮が高まって——。

——コンコン。

部屋にノックの音が響いたのは、シュリがベッドに入って十五分が経った頃だった。

「は、はいっ！」

急いでベッドから出て、ロッカーから予備のトレーニングウェアを取り出しソファに置いた。

ドアを開けると、紺色のスーツを着た嶋田が立っていた。

「こんにちは。お待ちしております」

「こんにちは。今日からよろしくね」

「こちらこそです。お仕事お疲れ様でした」

「ありがとう。今日からシュリくんに会えると思うと嬉しくて、普段なら面倒でやりたくない仕事も楽しく思えたよ」

嶋田は、規定されている「二日空け」で毎日通うと言っていた。仕事は大丈夫なのかと思っただけで、学生時代に同級生と立ち上げたという会社を続けているらしく、時間の融通が利くのだと言っていた。

学生時代ということは、今のシュリの年とそう変わらない。むしろそれより年下だろう。それなのに会社を立ち上げていたなんてすごいと思った。しかもそれが今でもちゃんと続いているなんて。

(やっぱりかっこいいなあ……)

子どもの頃は、恋愛感情に相手の社会的地位なんて関係ないと思っていた。今でも地位次第で感情が揺れるということはないけれど、できる男という意味ではとても魅力的で、好きになる要素の一つになると思っている。

「どうぞ」

場所を空けて室内に招き入れると、ドアが閉まった途端に抱き上げられた。

「わっ」

「ああ、ごめんね。早く触れたくて」

「ふふ」

焦らなくたって逃げないのに。でもこうして気持ちをストレートに伝えてくれるところが好き——まだ知り合ったばかりなのに、それでもその短時間で好きだと思ってしまうほど、嶋田は素敵な人だった。

「ベッド、温めておいてくれた？」

「はい。あ、でも先にお着替えを」

「ああ、そうだね。じゃあ服を……あれ？」

嶋田の視線がソファに移った。予備のトレーニングウェアは明るい色だったので、目に入りやすかったのだろう。

「あの、ごめんなさい……今日はそちらを使っていたでもいいですか」

「どうしたの？ 何かあったかな」

心配そうな顔。嶋田はシュリを横抱きにしたままベッドに腰を下ろした。



「いえ、その……」

「うん？」

本当なら、嶋田が今日着るのは今シュリが着ているものはずだった。しかしベッドの中で嶋田の到着を待っている間に——汚してしまったのだ。

「ごめんなさい、汚してしまつて」

「汚した？ 飲み物でもこぼしちゃつた？」

汚したと言いながらもそのトレーニングウェアを着用したままだと気付いた嶋田は、「痒くなつてない？」と心配そうに訊いてくれた。汚された怒りをぶつけるのではなく、そうやって心配してくれるところがとても優しい。

でも、だからこそ「カウパーで汚した」とは言いにくかった。しかし嶋田の持ち物だ。隠し続けるわけにはいかない。

「シュリくん？ 大丈夫？」

「あの……その、お汁、で……」

嶋田のトレーニングウェアを素肌にまとい、ベッドの中で持ち主の到着を待つ——それだけでペニスは完全に勃起し、淫らな汁をこぼしてしまったのだ。下着すらつけていなかった。その汁はすべてトレーニングウェアに吸収され、シミを作ってしまった。

「ああそうか。えつちなお汁が出てしまつたんだね」

「はい……ごめんなさい」

「かまわないよ。むしろ嬉しいな。それに、シュリくんのお汁は『汚れ』じゃないよ。まだ濡れてる？」

「はい……」

怒られなかったことには安堵した。でもこれはシュリの仕事なのだから、嶋田の優しさに甘えていいわけではない。

「そう。見せてくれる？ どこにお汁が付いちやつたのかな」

恥ずかしかったけれど、嶋田の言葉に逆らうことはできなかった。

嶋田の足の上から降りてベッドに座り、股間まで隠す大きな上衣を脱ぐ。

熱い視線が、テントを張った股間に向けられた。

「——本当だ。おちんちんが勃起しているね」

「っ……」

まじまじと見られると恥ずかしくてたまらない。トレーニングが始まればもつともつといやらしいところを見られるのだとわかっているけれど、性感を得ているときよりも、こうして素面のときの方が何倍も恥ずかしく感じられる。

「うん……先つぽがすごくよく濡れてる。これはおしっこのおもらしじゃないのかな」

「ちがつ……お汁、です」

「おしっこじゃなくて？」

「はい……えつちなお汁です……」

カウパーをお汁と称するのだからって恥ずかしい。でも、興奮する。興奮して、さらにシミが

広がっていく。

「あ、あ……」ペニスの先が冷たい。

「でもこんなに濡れるものかな？ カウパーと誤解しているだけで実はおしっこかもしれないよ」

「あ！」

トサ、と引きずり込むようにしてベッドに寝転がされた。突然のことに驚いている間に、ズボンの前立ての部分に顔を強く押し付けられる。

「あっ！」

スン、という音が聞こえた。「やつ！」

「ああ、本当だ。これはおしっこではなくカウパーだね」

「やあ……！」

だからさつきから違うと言っているのに。

「あ、でももう飲み物も用意してくれていたのかな。もしかしてスポーツドリンクをおもらし……」

それもあり得ると思ったのだろう。嶋田は合点したような表情を浮かべると、再び陰部に顔を埋めた。

嶋田の高い鼻の先端が亀頭をこする。

「ああっ！」

「……うん、やっぱりこれはちゃんとカウパーだ」

シユリはさつきから何度もそう言っていたのに、ようやく納得したような声。でも目は優しく、疑われているのではなく意地悪なことを言っているだけだとすぐにわかる。

(もしかして僕が意地悪言われるの好きって気付いてたのかな……)

「ねえシユリくん」

「は、はい……」

「——ここに……私の飲み物が？」

「あ……」

嶋田がそつと下腹部を撫でた。途端に中身を意識してしまう。

自分で入れたスポーツドリンク。嶋田に飲んでもらうために、たくさん入れた。

「出せるかな。未経験だったよね」

「あつ、」

軽くお腹を押された。尿意は感じていなかったのに、途端にトイレに行きたいような気持ちになる。

「どうやって飲ませてくれる？」

「え……？」

「亀頭を咥えてもいいのかな。それともコップに？」

「あ……どちら、でも……」

かろうじて、コップに出すというのは子どもの頃の検尿で経験している——ああでも嶋田

の目の前で、嶋田の持つコップに出し、そのまま飲まれるところを見る……なんて耐えられるだろうか。

「まだトレーニングは始まってないけど、少しだけ味見させてくれる？」

嫌なんて言えない。うなずくと、嶋田は丁寧にズボンを脱がせてくれた。

「これはあとで私が着させてもらおうよ」

(ああ……ダメ……)

それは確かに嶋田のものだけれど、その前立て部分にはこらえきれなかったカウパーのシミが残っている。汚れだから、乾けばいいなんてふうに考えることもできない。

「今日は……どうしようかな。まずは出すところを見せてもらおうかな」

露わになったペニスに、嶋田は「先日ぶりだね」と挨拶をした。それからベッドを下り、テーブルに用意されていたコップを持って戻ってくる。

「初めてだから、ゆっくりでかまわないよ」

水滴の跡一つない透明なガラスのコップ。それを陰部に寄せられる。

しかし――。

「勃起したままでは出せないね」

「すみませんっ」

萎えさせないと、と思うのに、すぐ近くから嶋田がじつと見つめるせいで萎えさせることができない。だってペニスと嶋田の顔が、視線を動かさなくても同じ位置で目に入るのだ。

こんなにいやらしい経験をしたことなんて一度もない。

「あの……」

「うん？」

「――いえ」

お客さまである嶋田に離れてくださいなんて言えるはずがない。でも見られれば見られるほど興奮してしまっただけ。

「あつ」

嶋田の顔とペニスの間は約二十センチ。吐息を感じるかは微妙な距離――なのに、ペニスが濡れているせいでリアルに感じ取れてしまう。

「……いいこだね」

嶋田が顔を左右に動かしながらねつとりとペニスを見た。

「え？」

「この子は――」

嶋田がペニスにほほ笑みかける。「まだトレーニング前だと戒めてくれてるんだよ。甘えるなどね」

「や、そんなっ」

違う、そんなこと考えていない。

「ああ、違うよ。シュリくんがそう思ってるなんて思っていない。このかわいいこがそう言っているんだろうなと思って」

「や……」

ペニスを「かわいいこ」なんて。それに意思を持たないペニスは、そんなことは考えない。単にシュリ自身が見られて悦んでいるだけだ。

「トレーニングを頑張れば、そのあとはくたりとしてたくさん飲ませてくれるんだろう」

「あ……んう……」

ぞくぞくした。だって、ペニスが力を失うほど刺激されるということだ。たくさん射精……するのだろう。させられる。させてもらえる。

「ドリンク休憩はご褒美のようなものだろうからね。先に飲もうなんてずるい考えだったよ」悪かったね、と嶋田はペニスに向かって謝った。

「いえ……」

「では……ええと、着替えたらいいのかな」

「あ、はい、でもお着替えのあとはベッドで体温を」

「ああ、そうだった」

嶋田を脱がそうと手を伸ばしたけれど、自分でできるよとやんわりと断られてしまった。

嶋田は戸惑うことなく、シュリが汚したウェアを身に着ける。

「よし。おまたせ」

「どうぞ」

着替えが終わったところで布団を捲り、嶋田と一緒に寝転がる。すると嶋田は前回と同じように丁寧に布団を掛けてくれた。

「おいで」

「失礼します」

腕枕も前回と一緒に。でも、もう抱きしめていいかとは訊かれなかった。

（あつ……）

嶋田のトレーニングウェアが肌にこすれる。さっきまでシュリが着ていたトレーニングウェアを、嶋田が着ている。当然嶋田は下着もTシャツも中に着ているけれど、やはり汚してしまった部分が気になって。

「あの、冷たくないですか」

「え？」

「その……」

言葉にするのは恥ずかしすぎた。それを感じ取ったのか、嶋田が優しい声で続きを引き取ってくれた。

「シュリくんのおちんちんのお汁で濡れてしまったところのことかな」

優しいと思ったのに、言葉は意地悪。でもそんな言葉にも興奮が高まり、ペニスの硬度がさらに増す。

「あん……」

「ああ、今度は外側から濡らしてくれるのかな」

「やあつ」

腰をぐつと引き寄せられると、嶋田の硬いペニスをそこに感じた。

「あつ」

「シュリくんがとてもかわいいから」

「やあ……」

かわいいと思ってもらえるようなことなんてしていないし、言ってもいない。ただ欲のまま、勃起をさらしてしまっているだけだ。

「体温が高いから本当によく温まるね」

「あ……いえ、」

「うん？」

ベッドで体温を上げる、というのはこうしてベッドの中で抱き合うという意味ではない。それだけでは、足りない。

「おちんちんも……嶋田さまのおちんちんも温めるんです」

「私のペニス？」

「っ……はい……」

ペニスとおちんちん——嶋田のその使い分けは、単にシュリのそれが子どものような見た目だからなのだろうか。

「——どうやって温めてくれるのかな」

「僕の……お尻に」

くると背を向け、嶋田に向けてお尻を突き出す。そうしながら後ろ手で、嶋田のズボンのウエストゴムを探る。

「……もしかして中に？」

「はい。僕のお尻の中で暖まってください」

なんていやらしいセリフだろう。でも、行為自体は決められたこと。これも仕事の一つだから。

「だが、シュリくんここはまだ誰のことも受け入れたことがないんだろう？」

「はい」

童貞処女、というのは前回会ったときと変わっていない。でも、元々こうして温める仕事もあるというのは承知していたし、その上でトレーナーになったのだから、これで初めてを終える覚悟はあった。

それに今は、嶋田に初めてをもらってもらえる喜びの方が大きい。

「ダメだ、いけないよ」

しかし嶋田はペニスを出そうとしたシュリの手首を掴んで制止した。

「あ……」

「初めてというのは言葉のとおり一度しかないんだよ。一度でもここで受け入れてしまえば、もう処女に戻ることはできない」

「はい」

そんなことはわかっている。でもそれでもいいと思っていたし、相手が嶋田だと思えばな

おさら後悔も不満もない。

「……ダメだ。せつかくきれいな体なんだから、大事にしなさい」

「あ……」

どうしてそんなことを言われたいといけないのだろう。だって、嶋田だって「トレーニングではシュリくんのお尻も貸してもらえらんだよね」と言っていたのに。

そのことを聞くと、「気持ちが変わったんだ」と端的に言われた。

「シュリくんは私の専属だね？ 他の男の担当になるとか、使われてしまうようなことはないね？」

「はい、ないですが……」

一対一の特別コース。専属なので、その言葉どおり嶋田にしかつかない。そして嶋田が来る日に必ずいられるようスケジュールは常に空けておかなくてはいけないので、月の生活を保証するため、会員の払う費用はSコースよりも高額だ。おそらく年間四百万円は下らないだろう。

「よかった。それならそんな簡単に大切なところを明け渡してはいけないよ」

「嶋田さま……」

嶋田ならいいと、初めてが嶋田でよかったと思っていたのに――。

「温めるなら、こちらを借りるよ」

「あつ」

右足がぐつと持ち上げられた。そしてその太ももの間に大きなペニスを差し込まれる。

「あつ……」

「ああ、とても温かい」

太ももの間にあるペニス。

くくく

「ああつ！ さん、じゅう、につつ！」

床に仰向けになって自らペニスの皮をむき、シュリの下半身の上で腕立て伏せをする嶋田の口に入るように固定する。

「あああつ！」

嶋田が上下運動を繰り返す度、すぼめられた口にペニスが刺激され激しい快感に襲われた。

「……シュリくん、何回？」

「あつ、ごめつ、なさつ、さつ、じゅうき、あああつ！」

嶋田は少しもつらそうな様子を見せず、淡々と腕立て伏せを続けた。でももう、シュリのペニスが限界だ。サイクリングマシンのときからすでに痛みを訴えるほどだったのに、ずっとこのペースで刺激され続けてしまっている。

（イきたいっ……！）

――のにイけない。このペースの刺激ではイけない。なのに時折いたずらするように亀頭

を舐められるので、余計に射精欲は高まる一方で。

「あああつ！ さんじゅ、しっ」

回数を数えるのだってもうつらい。ペニスの刺激にだけ集中したいのに。そうしたら、もしかしたらイけるかもしれないのに。

「あああつ！」

いきたい、イかせて——言いたくても言えない。今はトレーニング中なのだから、お客さまである嶋田の邪魔をするわけにはいかない。それに百回目に合わせて射精しなければならぬのだ。このもどかしい刺激を必死に体内に蓄積させて、タイミングを合わせてそれを弾けさせなくては。

「あああつ！ さんじゅ——」

いくつだったか忘れてしまった。三十……いくつだっただろうか。

「シュリくん、何回かな」

「ごめんなさいっ、わかんなく……」

目を閉じて必死に思い出す。三十……三は言ったような気がする。でも四は……言っただろうか。

「じゃあ、もう一度最初からしようか」

「え……」

(最初から……?)

血の気が引いた。それでなくてももうペニスはイきたくてイきたくて壊れてしまいそうなのに。

「さあ、一から数えてくれ」

「あ……あああつ！」

嶋田はつらくないのだろうか。せつかく三十以上こなしたというのにもう一度最初からならんて。

しかし嶋田は涼しい顔でペニスを咥え、腕の力を使って離れた。

「あああつ！」

「ほらシュリくん、ちゃんと数えて。これでは百回にならないよ」

「あ、すみませつ、にっ！」

今が二回、それはわかる。でもこのまま本当に百回なんて無理に決まっている。嶋田はそれくらいできるのかもしれないけれど、シュリの頭がおかしくなってしまう。

「ああつ！ さ、んっ」

じゅぷ、とすぼめられた唇がペニスを根元まで咥え、そしていたずらに裏筋や亀頭をちろちろしながら離れていく。

「やああああん！」

先をちろちろするのはダメ。気持ちよすぎて壊れてしまう。

「どうしたの？」

「やああ……さきつぽ、ちろちろしないで……しないでっ、ください……」

生意気な口調になってしまい、急いで言い直した。けれどももう口もうまく回らず、はっきりと話すことができない。

「ああ可哀想に。泣いてしまったね」

「うう……」

体を起こした嶋田は疲れを見せないその力強い腕でシュリの体を抱き起した。そして強く抱きしめ、額に頬をこすりつけてくれる。

「ううう……」

「シュリくん、いじめすぎてしまったね」

「あ……や、ごめんなさいっ」

いじめだなんて。ただ嶋田はトレーニングをしているだけだったのに。

必死に首を振ると、嶋田はそれを押さえつけるようにシュリの頭を抱き込んだ。腕立て伏せによって盛り上がった胸筋が頬に当たる。

「いいんだよ。面談のときにも言っただろう？」

私は初めてのシュリくんを気に入ったんだ。

どれも初めてなんだから、お互いに言いたいことは言いながら楽しくやっていく方法を見つけたい」

「あ……」

嶋田は会員費を払っていることを理由にシュリの頑張りを搾取しようとはしなかった。対等дейようとしてくれている。それが嬉しかった。

「嶋田さま……」

「だから敬語もいらないよ。なかなか難しいかもしれないが、せめてさっきのように感じているときくらい、敬語は抜きにしてほしい」

「でも……」

「いいんだ。敬語を使わなきゃ、なんて余計なことを考えるより、素直に気持ちを表してほしい」

「嶋田さま……」

だからさっきのをもう一度言っごらん、と嶋田が言った。

「さっきの……？ って何です——」

「ほら、敬語」

早速注意されてしまった。でもその言い方もとても優しい。

「さっきのってなに……？」

恐る恐る訊くと、嶋田が腕の力を緩めた。顎を持たれ、視線が合う。

(あ……)

感じすぎて泣いてしまった顔を見られている。恥ずかしい。

「さっきのだよ。先っぽちろちろしないでって」

「っ……や……」

恥ずかしい。さっきはどうかやめてほしくて、助けてほしくて必死だったのだ。でも今はそのときよりも冷静だ。とてもこんな状態で言えるような言葉ではない。



「だがシュリくんはえっちな子だろう？ 恥ずかしい言葉を言って、もっと感じてごらん」  
「あ……」

「私は恥ずかしいと泣きながら勃起をさせて、おねだりしてくるような子が好きなんだ」  
——だから、そのようになれという意味なのだろうか。それとも、シュリが実はそんな子なのだと知っているよという意味なのか。

「だから、『恥ずかしいから嫌』はダメだよ。恥ずかしいからこそしてほしいんだ」  
「嶋田さま……」

もう、客だからとは思わなかった。嶋田だから、嶋田の言うことを聞きたかった。  
ぎゅつと目を閉じ、硬い胸筋にまぶたをこすりつけながら口を開く。

「嶋田さま、僕のおちんちんの先っぽ……ちろちろしないで……」  
「どうして？」

嶋田の興奮が高まったのが、声だけでわかった。

「……おちんちん、おかしくなっちゃうから」

「おかしくなるとどうなってしまうのかな」

どうなってしまうのだろうか。そんなこと、考えたこともなかった。ただおかしくなってしまふと、それが怖かった。

「わかんない……」

「わからない？ そうか、それなら一度、どうなってしまうのか試してみようか」  
「えっ」

言ったらやめてくれるんじゃないのか。てっきり、恥ずかしいおねだりをしたら叶えてくれるものだとばかり思っていた。

「一度どうなるか知ってしまったえば、次からは怖くなくなるかもしれないよ。まだシュリくんは初心者だから初めて経験することばかりだと思うけど、一つ一つ経験を積み重ねてもっといやらしい子になってほしい」

そう言われて、断れるはずがなかった。それでも言葉で返事をする勇氣はなくて、小さく顎を引く。それだけで、嶋田は褒めるように後頭部を何度も優しく撫でてくれた。

「さあ、じゃあもう一度横になって、おちんちんの皮を自分でむいて」

「はい……」

く  
く  
く

「力を抜いていて」

「はい……」

ベッドの上で横向きになって膝を抱えたまま、ぼうつとした頭で考える。

——これからどうなるんだろう。

チェンジになったらまた研修からのスタートになるのだろうか。それとももうクビだと言われてしまうのだろうか。

「入れるよ」

「はい」

嶋田の指が入ってきた。痛みはないけれど、存在感がすごい。

「あっ……」

「ん？ 気持ちいいかな」

嶋田の嬉しそうな声に、羞恥心がつのった。

「や、あ……」

「でもごめんね、今日はこっち」

まさか指で精囊に届くのだろうか——驚いていると、指が抜かれた。そして指より硬い無機質なものが入ってくる。

「あっ……」

「力を抜いてね。痛くない？」

「ん、はいっ」

硬い。その硬さが玩具を思わせドキドキする。

「いいこ。そのままね」

器具がぐーっと精囊を押しした。それから一度力が弱くなり、角度を少し変えて再び押される。

「ん……」

「あ、出てきたよ。でも三回も出したからほとんど出なさそうだね」

ペニスの先は、足で挟んで嶋田の方に向いている。だからその状態がどうなっているかはわからない。

見たい。けれど、少しだけ怖かった。

（まだ感覚ないのかな……）

「ああ……すごくかわいい。本当なら気持ちよく射精する精液、こんなふうにおもらしして」

「っ……」  
しつとりとした言い方に体の熱が上がる。もう三度も射精したのに、まだ興奮できずしてしま

うなんて。  
それに、もしかしたらチェンジはされないのかもしれないと思えてくる。

「ん？ おちんちんの穴がばくばくしてるよ？」

「やっ……」

チェンジされないかも——そう思っただけで反応した体。本当に現金すぎて、自分でも恥ずかしい。

「無理矢理精液を搾り取られちゃって苦しいのかな？」

「っ……くる、しくない、です……」

ペニスの感覚もないし、さすがにこれ以上イきたいとは思わない。残った分を嶋田に出させてもらえて嬉しいくらい。

「そう？ よかった。これから会う度するからね」

よかった。やはりチェンジはされないのだ。それならまた次、挽回できるように頑張ることが出来る。

「——ん？ 嫌だった？」

「え？」

「何も言わないから——」

「あ……ごめんなさい」

「疲れちゃったかな？」

「精囊を押す力がなくなつた。気にせずしてくれていいのに。」

「いえ……その、僕失敗ばかりだったから……だからチェンジされちゃうのかも……」

「チェンジ？ どうして」

「あの……話があるって……」

こんな大事な話、お尻を向けたまましていいものではない。でもまだアナルにミルクグ棒が入っているので、体を起こすことができない。

「ああ……ごめん、不安にさせちゃつたね」

「んっ」

もう一度精囊が潰された。数回角度を変え、アナルから抜けていく。

「シュリくんのお汁、搾り終わったよ」

「あつ……」

お汁という言い方。やっぱりすごくいやらしくて、興奮する。

「よく頑張つたね」

嶋田がペニスの先端をタオルのようなもので拭つた。それから片足を持ち上げられ、ペニスを自然な位置に戻される。

「おちんちんの場所、ここでいい？」

「はい」

ここ、と言われても、下着を着ているわけではない。ただだらりと重力のまま垂れているだけなのに。

「本当にかわいい。横になったままこちらを向いて」

体の向きを変えると、優しい目と視線がぶつかった。こんな目でミルクグされていたのかと思うと喜びで顔が熱くなる。

「話つていうのはね、このおちんちんを私だけのものにさせてほしいなって言いたかつたんだ」

「嶋田さまの……」

「そう」

嶋田がベッド横に置かれたカバンから小さな箱を取り出した。中に入っていたのはプラスチックでできた、ペニス全体を覆うタイプの貞操帯。

「これ……」

「シュリくんのおちんちんがほしいんだ。私のものになりたい」

「嶋田さま……」

嬉しい、と思った。嶋田のものになりたい。本当は恋人という形にしてほしいけれど、さすがに初日だし、ペニスだけでもいい。

「トレーニングは二日空けるのがルールだったね」

「……はい」

そんなルール、なくなればいいのに。

「その間、我慢できる？」

「え？」

「お汗も出せないし、おちんちんを洗うこともできない」

「あ……」

「でも、私は必ず来るよ。もし来れないと事前にわかればそのときは貞操帯を外して帰るから」

「……いえ」

「やっぱり嫌、かな」

残念そうな、けれど無理強いをしない優しい嶋田の言葉に首を振る。

「来られないときでも、待ってます」

「シュリくん……？」

「僕のおちんちんは嶋田さまのだから、勝手には触れません。ちゃんと嶋田さまに会えるまで待ってます」

顔を見ながらでは恥ずかしかったので、嶋田の胸に抱きつきながら言った。でも言えたら、いい。

「ああ……」という熱いため息が頭上から聞こえてくる。

「嶋田さま……？」

「ああ。もうシュリくんのおちんちんは私のものだよ」

「はい」

その言葉が本音だと伝えるため、シュリ自ら体を離した。貞操帯をつけやすいよう、足を開いて座る。

「……ああ……いやらしい。それにかわいいよ」

嶋田の手が力を失った。ペニスを持った。それから透明の貞操帯をはめていく。

（……慣れてる……）

その手は止まることがなかった。あつという間にはめ終わったし、サイズもジャスト。

（他にも……いるのかな）

きつといるだろう。優しいしかっこいいし、落ち着いているし……特別コースを契約できるくらいなのだから収入だっついいのだろう。

「これで私のだ……」

最後に小さな鍵がかけられた。これでもう、シュリには外せない。

「念のため、スペアはカウンターに預けておくよ。何か緊急の問題が起きたときはそこで鍵

を外すんだ」

「……わかりました」

そんなものいらない。でもうなずく他なくて。別に、何かあっても使わなければいいだけだ。

「おちんちんをよく見せて」

「はい」

足を開いた状態で、至近距離からの視線に耐える。さすがにもう勃起はしなくても、むずむずする感じはあった。

「うん、似合ってる。四つん這いになって」

「はい」

お尻を嶋田に向ける形で四つん這いになる。すると背後から貞操帯を持たれ、足の間を通す形で後ろに引かれた。

「あん……」

「うん、こつちから見てもよく似合ってる。とてもかわいいよ」

くくく

足の間差し込まれたペニス。ちゃんと感じたいのにオムツが邪魔で感じ取れない。かろうじて太ももに触れているのがわかるけれど。

「そのうち濡れたオムツにこすりつけたいな」

ペニスはもう硬い。少しでもいいから触れたくて、亀頭を撫でるように手を動かす。

「撫でてくれるのかな。それとも温めてくれるの？」

なんて答えたらいいかかわからない。ただとにかく嶋田の勃起に触れたくて。でももう、興奮しすぎて息苦しい。

「嶋田さまあつ……」

「おねだりの声になってる」

笑われて、恥ずかしくて。でも嶋田の声が嬉しそうに聞こえて。それでこれでいいんだ、えっちなままでいいんだ、とまるで許されたように感じられて。そうしたら、なんだか解放されたような気になってしまった。

「嶋田さままつ、オムツつ……」

苦しい。まるで過呼吸になったみたい。はあはあと荒ぶる息を整えることができない。

「うん」

シュリの興奮に気付いている嶋田が、穏やかに「ふふ」と笑う。嶋田だって勃起しているのに。なのに、どうしてこんなに余裕があるのだろうか。

「はあっん……」

手を動かし、嶋田の亀頭を何度も撫でる。だってここしか触れられない。少しでもたくさん、嶋田のペニスを感じたい。オムツと貞操帯がなければ一緒にペニスを扱けたのに。

「嶋田さまっ！ おちんちんっ……！」

息苦しい。ペニスを刺激したい。自分のペニスはいじりたくてもいじれないから、嶋田のそれを自分のものに見立てて先端を撫でる。

「気持ちいいよ。シュリくんはいつも自分でそうやっていたのかな」

ペニスに集まるべき血液が行き場を失い、まるで頭に回ってきているかのようにクラクラする。ペニスが壊れそう。でも嶋田の声にもだんだん熱がこもってきた。それに、シャツを着ているのに背中に触れる体温が熱い。ゆっくり腰が引かれ、ペニスが手から離れていく。でもまたすぐに手の中に戻ってきて。

「シュリくん」

「嶋田さまあっ……！」

オムツがいらぬ。オムツが邪魔。でも嶋田がつけてくれたオムツ。

「シュリくんにおしっこをしてほしいな。でもさっきスポーツドリンクを全部飲んでしまったからもう何も出ないかな」

（「もう何も出なく……」）

ということは、さっきのスポーツドリンクは尿の味がしたことだろうか。もし単なるスポーツドリンクだったら、今頃尿ができていと言われるような気がする——考えすぎだろうか。

「嶋田さま……！」

「こんなことなら残しておくんだったな。全部飲むじゃなかったよ」

「そんな……！」

だって、オムツに出すより嶋田に飲んでもらった方が嬉しい。研修のときは人の口になんて出せないと思っていたのに、今ではもう嶋田にたくさん飲んでほしくなっている。

「おちんちんから飲まれるの気持ちよかった？」

「はいっ……！」

頭が熱に浮かされていて、普通なら答えられないようなことも素直に言葉にできてしまう。

「また三日後、たくさん飲んであげるね」

「たくさん……？」

「そう、たくさん。途中で追加してくれてもいいよ」

「そんなに……！」

「喉がたくさん乾くくらいシュリくんの体でトレーニングをするから」

（ああ……）

すごいえっちだ。こんなにえっちで、次から本当にトレーニングに集中できるだろうか。頭の中がいやらしいこといっぱいになって、トレーニングそっちのけで気持ちいいことをしてほしくなってしまうそうだ。

「かわいい……体温が上がったね」

「んっ……！」

少しでも嶋田のペニスを感じたくて、足を閉じて締め付ける。

「太ももが柔らかいね。細くて肉がないのにちゃんと締め付けてくれるよ」

いいこだ、と言いなながら嶋田の手が乳首に触れた。乳頭を揉まれながら腰を振られる。

「あ、あ、あっ！」

「いじりすぎて、肌が痛くなってしまっていないかな」

「大丈夫、ですっ！ もっとっ……っ！」

「かわいい。ねえシュリくん、ここは何と言うんだった？」

「あああっ！ あっ、あっ、おっぱいっ！ おっぱいっ！」

イきたい。気持ちよくなりたい。でも貞操帯が、オムツが……それにもう精液は残っていない。

「うん、正解。ちゃんと覚えていてえらいね」

「ああんっ！ お汁出したっ！」

思わず叫んでしまった。無意識だった。嶋田の返事はなかったけれど、それに応えるように乳頭を強く揉まれた。

「ああんっ！」

「シュリくん、シュリくん出すよっ！」

「嶋田さまっ！」

手を出してほしかった。ねだるように手を動かすけれど、亀頭はすぐに手から離れていってしまう。でもまたすぐに戻ってきて。

「シュリくん、シュリくん！」

「嶋田さまっ！」

シュリが亀頭に触れられる位置で、ペニスの動きがピタリとやんだ。直後、手に温かいものがかけられる。

「嶋田さまのお汁……嶋田さまのお汁いっぱい……っ！」

びゅる、びゅる……と数回にわけて精液が吐き出される。量が多い。手の角度を変えるとこぼれてしまいそうで、手でおわんを作るようにして受け止める。

「すぐよかったよ。シュリくんはおちんちんの勃起もできないのに……ごめんね」

いじわるな言葉に、無意識の熱いため息が漏れた。

「はぁ……ん」

「興奮しているね」

「はい……」

だってシュリが射精できないのに嶋田は気持ちよくなったのだ。いかにも体を使われましてというこの状況が官能的だった。

「シュリくんはMだね。とてもかわいいMだ」

「かわいくはないですけど……たくさんいじめてほしいです。たくさん体を使ってほしい……」

「シュリくんは体を使われてしまうのが嬉しいんだね」

「はい……」

だからこそ、このトレーナーの仕事を選んだのだ。いやらしいことに体を使われたい。この体に欲情して、たくさん精液を吐き出してほしい。

「今日は初日だったから短かったけど、次はたくさん……一日中体を借りるよ」

「一日中……」

「そう。朝から晩まで休憩を挟みながらシュリくんの体を弄ってトレーニングをする」

「はいっ……!」

嬉しい。たくさん体を使ってもらえる。それに朝から晩までなんて、嶋田とずっと一緒に過ごすことができるということだ。

「二日も会えないなんて寂しいな……でも三日後、絶対に来るからね」

「はい……お待ちしています」

別れの時間がきてしまう。まだ今から嶋田のペニスを清めたり、身支度を整えたりということはあるけれど……それでももうすぐ、終わってしまう。

「えっちなお汁、たくさん溜めておいてね」

——なのに三日後、夜になっても嶋田はやってこなかった。

10万1千字、9割エロです。  
宜しく願いいたします!

肉体改造エクスタシー 特別コース編 サンプル

gooneone (ジーわんわん)

2021/9/25

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

